

神戸に産するキセルガイは、シロナミギセル *Ph. (Stereophaedusa) japonica kobensis* (Smith), シリオレギセル *Tyrannophaedusa bilabrata* (Smith), カリストギセル *Hemiphaedusa caryostoma* Möellendorff (以上神戸にて発見されたもの)¹⁾, シリオレトノサマギセル *Hemiphaedusa (Megalophaedusa) ducalis decapitata* Pilsbry, ツムガタキセル *H. platydera* (v. Martens), チビキセル *H. pigra* (Pils.), ホソヒメギセル *H. graciliispa* Mlldff. ウスベニギセル *H. (Tyrannophaedusa) aurantiaca* (Bttg.), アワジウツミギセル *H. (Stereophaedusa) oostoma dactylopoma* (Pils.), ナミコギセル *Phaedusa (Euphaedusa) tau* (Bttg.) の10種であります。これらもシロナミギセル同様市内の各地で採集されていますが、今後の研究調査によつてなお増加することと思ひます。

次にコウベマイマイは頗る扁平で、大きなヘソを具えた心形のカタツムリで、殻口は反曲し、内部は白くて厚い滑層があります。高さ7mm、径15mm位の大きさですが、大小種々あります。板宿、布引、垂水、平野、有馬、須磨等で採集されていますが、縣下各地及山陽、四國、九州に分布しています。木蔭の草間にすんでいます。個體数はあまり多くはありません。1890年デンマーク人 Schmacker, ドイツ人 Boettger 兩氏によつて學界に發表されています。

オトメコイコイも神戸で発見されたカタツムリで、半透明で白色に近い灰白色の貝殻を有し、高さ7mm、径11mm位の背の低いえんすい形の貝です。草の葉や灌木に登つて生活します。アワジヒメコイコイ、チビコオトメ、シコクオトメ等は本種の地方的變異型といわれています。

ハリママイマイは1878年 Smith 氏が神戸を模式産地として發表したものでありますが、其の採集地は今の神戸の何處であつたかは不明です。矢倉先生に従えば、多分神戸の東部であつたろうとの事であります。しかし大神戸の發展と共に分布状態にも變遷があり、現在市内ではあまり多くの採集は望みません。播磨一圓に廣く分布していますが、攝津の東部、但馬、備前、淡路には殆ど居ないもので、やはり播磨を代表するカタツムリというべきでありましょう。明石公園は絶好の採集地であります。しかし兵庫區の平野附近からは、模式的な良品を採集することが出來ます。

以上神戸で発見された陸産の貝について記したのでありますが、大方諸賢の御叱正を賜らば幸甚で御座います。

サカマキガイに就いて

サカマキガイ *Physa acuta* Draparnaud は昭和二十三年十月廣島文理大の龍巖博士が御來神の節、灘高校の川崎正先生邸(武庫郡魚崎町)に御一泊になり、附近の溝で御採集になつたもので、兵庫縣下では最初の発見であります。この貝はモノアラガイ *Limnaea (Radix) japonica* (Jay) に似た淡水産の巻貝ですが、貝殻が左巻であること、腹足が藍色であること、などで一見してモノアラガイとは區別が出來ます。

龍博士から川崎先生や私にお手紙で、色々御教示を賜りました。即ち本種は歐洲の中央部多分佛蘭西あたりの原産で、英國には1840年頃輸入されて繁殖したものゝようであり、我國へは昭和10—15年頃、鑑賞淡水魚の飼育が盛に行はれた頃、渡來したものらしく、大阪でも採集された事があるとの事であります。卵の發生については、モノアラガイと同じく、實驗室にて容易に觀察出来るものでありますが、胚の8細胞期から、16細胞期に移る際モノアラガイは右廻り、本種は左廻りに分割するから、そういった研究にもよい實驗材料であると、教へて戴きました。博士は又この貝を「サカマキガイ」と呼んでどうか、といつておられるから、いづれ、これが和名となることでしょう。

私も飼育して觀察していますが、只今第二世が3mm位に成長し健在であります。(古川記)